

参加型デザインプロセスに関する一考察 —安房塩見バス停留所プロジェクトを事例に—

A study of participatory design process

A case study of Awashimi bus stop project

学籍番号 47-176763

氏名 福田 泰之 (Yasuyuki Fukuda)

指導教員 岡部 明子 教授

1. 序論

1-1. 背景と目的

近年、公共建築において住民参加型プロセスは、ワークショップ等の計画手法が一般化し、もはや計画プロセスにおける市民参加はあたり前ともいえる状況である。⁽¹⁾ 住民参加の目的として、建設後の利用を促進することや、運営者を育むことが挙げられる。その中で、デザインプロセスには課題があることが指摘されている。最大公約数的、中庸に陥ってしまう問題⁽²⁾と免罪符として使われる問題⁽³⁾である。中庸問題は、多数の意見を取り入れようとすることで最大公約数的解を求めた結果デザインが無害で中庸になるという問題である。免罪符問題は、参加者の要望を聞くことはするが最終的なデザインにあまり反映されず、途中プロセスで参加があったという免罪符として住民参加が使われる問題である。これらは利用者が参加することと最終成果物の建築との力関係のバランスが難しいことを示しており、この点を建築家らに問う「住民参加は建築デザインに有効なのか」という特集も組まれた。⁽⁴⁾

さらに今日的な課題として、参加の意見を収斂させることは利用後の多様性を削ぐこ

とに繋がり、時代に絶えない建築になるとの指摘もある。⁽²⁾

本研究では、筆者の所属する研究室の活動の一環で進めているバス停留所を事例として取り上げ、参加型デザインプロセスの視点から考察を加える。上述、参加型デザインの課題を克服する知見を得ることを目的とする。

2. 対象とするバス停留所について

2-1. 対象敷地とゴンジロウ

岡部研究室は2009年から千葉県館山市塩見区に「茅葺きゴンジロウ」（以下ゴンジロウ）を運営している。塩見区は、毎月25日に、掃除当番・予算案の決定など、区の自治的な運営のために塩見区会（以下、区会）を開催している。また祭りなどのイベントも盛んで地縁の濃い地域である。

2-2. 西岬海辺の里づくり協議会

ゴンジロウを拠点に、月に1度集落の住民と研究室が話し合う西岬海辺の里づくり協議会（以下協議会）を開いている。塩見区の三役を中心とした住民と定期的に情報共有する場である。また、屋根の葺き替えや流し素麺などの活動も行っている。

3. バス停留所デザイン

3-1. バス停プロジェクトの発端

安房塩見バス停はゴンジロウの最寄りのバス停で、館山駅に向かう上り側だ。近年、バス会社と初の話し合いの結果、スーパーマーケットを通るルートへの変更が実現した。このように、病院へ行くため、買い物に行くためなど高齢化する住民の重要な足として機能している。しかし、海が近く、風の影響を受けやすい立地のため老朽化が進み、台風によって壊れたことがきっかけとなり、協議会で建て替えの話が上がった。



fig1. 既存バス停

3-2. プロジェクトの体制と諸要件

協議会で建て替えプロジェクトが発足し、建築デザインを行う筆者 FY と区の現状や要望を伝える住民、建築家・教員・大工といったアドバイザーをコアとする体制でデザインを進めた。1年半の活動で15回の協議会が開催され、模型や図面を用いた提案が12回行われた。同時に木材の建材化の中で3回のワークショップ（以下 ws）を開いた。

・経験の共有

既存のバス停は、バスが来たことが分からない視認性に問題がある点、風が強いという気候条件、バス停で寝ている人がいたという防犯の観点といった、住み手の経験が共有された。これらの中でも特に、視認性の確保と日常的な風や日射を防ぎたい点に要望があり、CFD 解析を用いて要望を形にするやりとりをした。

・材料について

多種の素材を検討し、塩害の可能性から木造のバス停を提案したところ、裏山の木を無償で建材として使うことを持ち主から提案された。そこから、裏山の木という即物的なものから発想したデザインの可能性を膨らませる議論が起きた。その過程で、最初は市販されている角材で提案していたが、裏山に生えている丸太の状態の木を使う話になった。裏山の木を使うために、5月・8月・10月に ws を開催した。木の状態を判断する材木屋 OT、乾燥方法と搬出方法を教える立場の移住建築家 TS、伐採をする木こりも加わり、木を建材化した。搬出後には木材に対して、3d スキャンから正確に形状を把握することや、構造性能を測るための材料実験を行った。



fig2. 皮剥き間伐 ws 直後の森の様子

・台風の問題

既存バス停を解体するため見積もりを取っている時、巨大な台風が直撃した。住民も経験したことのない程の風によって既存バス停は壊れ、解体の必要がなくなった。そして、今後同規模の強風が再び起こっても問題が起こらないバス停が求められた。

・土地の問題

強風に耐える強度を得るために基礎から作るようになった。土地所有者をはっきりさせると県道であることが分かり、占用許

可と確認申請が必要となった。また道路内に建設するため県の建築審査会に通した。加えて、住民から建設後のバス停の使い方や状況に合わせた増改築の可能性が引き続き話し合われている。

4.プロセスの分析・考察

・分析

本プロジェクトではデザイン提案と木材の建材化が同時並行で行われ、このうち木材の建材化の過程から、ws 開始前、乾燥中、搬出後という大きく3つのフェーズがあったと考えられる。(fig3)

・フェーズ1 (ws 開始前)

住民の経験からくる意見として、開放性（視認確保）と閉鎖性（風・日射対策）の両立があった。これらの意見を盛り込んだ提案を繰り返し行なったが、実施設計に進むような進展は無かった。一方、木造の提案に対して住民から裏山の木を提供する提案があった。

・フェーズ2 (乾燥中)

建築デザインが固まる前に、建材化のwsが開催された。住民の許可を得てデザイナーは裏山に入り、木のスケッチや乾燥・伐採・搬出を行い、木に対する理解を深めた。住民は実物や労力を提供した。例えば、SN

は木材を提供し、IT は木を建材とする作業を手伝い、IH は素材を探した。また、材木屋や木こりの支援が得られた。デザイナーが裏山の木を素材とするプロセスを体験する中で、「森にいるようなバス停」というコンセプトが生まれた。

・フェーズ3 (搬出後)

コンセプトとそれが反映された建築設計は否定されず、デザインの大筋が決まった際には、住民から拍手も起こった。途中、台風の襲来があり、風除けよりも台風で倒れないことが優先され壁がなくなった。一方、竣工後の利用方法や閉鎖性を高めるための増改築の話合いは続いている。(fig4)

プロジェクトは計画から実施施工に移り、実現しつつある。フェーズ1でデザイン提案を繰り返すことに終始していた活動が、フェーズ2で実地活動から議論の方向性が変わり、またデザインの中核となるコンセプトを得たことでフェーズ3まで到達した。

・考察

本プロジェクトから得られた参加型デザインの課題を克服する知見は、以下6点にまとめられる。

1) 住民から既存のバス停の問題点の指摘はあるが、解決するためのデザイン提案は

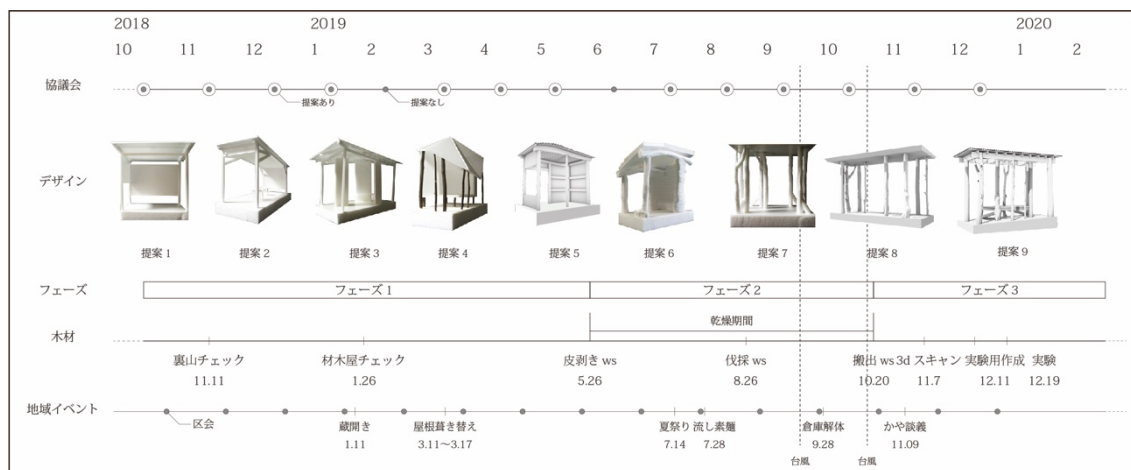


fig3. 活動スケジュール

出てこない。(フェーズ1)

2) デザイナー(学生)がデザイン提案と機能の説明をしても、住民から難点は指摘されるが、共創にはつながらず、デザインが収斂に向かわなかった。(フェーズ1)

3) デザイナー側から建材に関して、規格製材を用いるという提案に対して、住民から「裏山の木を使ってはどうか」という具体的な提案が出てきた。(フェーズ1)

4) 建材利用に関する住民からの提案が出てから、それが前提となり、「どう使うか」「どう切り出すか」に話し合いの中核が移り、機能的な視点は二次的なものになった。(フェーズ2)

5) デザインの基本設計を固める前に、木を切り出すことを先行させたところ、実践をきっかけに参加する人が加わり、「切り出した木を使ってバス停をつくる」というデザインの方向性が固まった。そして「森にいるようなバス停」というデザインコンセプトの共有につながった。(フェーズ2)

6) デザインプロセス中に台風による既存バス停の倒壊があったため、風除けとなることより倒壊しないことがデザインの優先される一方、法的手続きを確認することの重要性が認識された。(フェーズ3)

5. まとめ



fig4. 建設するバス停 完成イメージ

対象とした事例は、小規模で機能が単純な建物ではあるものの、デザイン提案や機能的な側面を話し合いで無理にひとつのデザインに収斂させようとする、住民参加の役割は薄れる。対して、住民側からの主体的な即物的提案(本事例では「裏山の木」)を核にすると、イメージが共有され、デザインが自ずと収斂に向かうことがわかった。デザインプロセスの途中で、実地作業する実践や偶発的な災害などもデザインを具体化していく一助となった。

デザインの質の観点では、参加型でなければ得られなかったデザイン、すなわち専門家と住民の協働創発によるデザインが可能になるには、具体的な建材の提供や協働実践といった、デザイナーによる一般的なデザインプロセスとは異なるものが要になるといえる。

本事例は、まだ本格的に着工していない段階ではあるが、機能的な側面についてはデザインを収斂させないまま工事を始め、工事中も引き続き参加型デザインを試行錯誤していきたい。

参考文献

- (1) 高野 洋平『公共施設計画における市民参加の持続性に関する研究』(2016)pp.1-10
- (2) 特集 建築の公共性を問い直す (2017.1) <http://10plus1.jp/monthly/2017/10/>
- (3) 木下 勇『ワークショップ 住民主体のまちづくりへの方法論』(2007)
- (4) 日経アーキテクチャ『ワークショップは建築デザインにプラスに働くか』(2005.1) pp.82-85